講師　：　深澤芳樹
天理大学客員教授、とっとり弥生の王国調査整備活用委員会座長

「東大寺法華堂のこと」 を聴いて

聴講日　：　H30.11.3
むきばんだやよい塾第19期

東大寺南大門を入って西側にある東大寺総合文化センター内に「東大寺ミュージアム」が2011年にオープンしましたが、その際に**法華堂八角須弥壇の上段**に安置されていた日光・月光菩薩が移され、展示されています。東大寺の境内には大仏殿をはじめとして多くの堂宇があって、たくさんの仏像が安置されていますが、その経緯については明らかでないこともあるようです。今回は、法華堂とそこに安置されていた仏像と建立の契機となった事柄についてのお話しです。

戒壇堂

戒壇堂は天平勝宝6(754)年に造営され、国宝の四天王立像が安置されています。これらの仏像は、江戸時代に中門堂から移されたものと言われているそうですが、その「中門堂」も焼失してしまいました。また、仏像が中門堂から戒壇堂に移された記録はありますが、最初はどこにあったか分かっていませんでした。

日光・月光菩薩

奈良時代の最高傑作の塑像です。ミュージアムに展示されるまで、法華堂の本尊である不空羂索観音の脇侍として八角須弥壇の上段に安置されていました。江戸時代(1705年)に編纂された「東大寺諸伽藍略録」に日光・月光として登場するまで、この二体がどう呼ばれていたかも分かっておらず、どこからか持ち込まれた客仏であろうと思われていました。その理由は、次のようなものです。

1. 不空羂索観音が3.6mの大きな乾漆像であるのに対して菩薩像は僅か2m余りの塑像である。
2. 左右対称に作られるはずの二体の菩薩が対称でない。
3. 通常菩薩は履かないとされる沓を履いている。
4. 月光菩薩はその衣に下に鎧を着けているように見える。

四天王像

四天王立像も奈良時代の最高傑作の塑像で、国宝に指定されています。戒壇堂に安置されていますが、江戸時代に中門堂から移されましたが、最初はどこにあったか分かっていませんでした。

塑像の作り方

塑像は、まず台座に心棒を立て、その心棒に藁縄を巻きます。次に藁縄に粗土を食いつかせます。腕や足の心棒を入れて中土で形を造ってゆき、中土でおおよその形まで完成させます。最後に仕上げ土で形を仕上げ、彩色を施して完成です。塑像はその形成構造により、像本体と台座が不即不離の関係にあります。

不空羂索観音菩薩像

法華堂の本尊は不空羂索観音菩薩立像で、脱活乾漆像(だっかつかんしつぞう)です。脱活乾漆像は、最初に大まかな塑像を造り、乾燥した塑像の表面を漆に浸した麻布で包みます。この「麻布の像」を乾燥(硬化)させ、麻布同士を固着させます。乾燥した像の上にさらに漆に浸した麻布で像全体を被い、漆を乾燥させます。この作業を立像の場合10回程度繰り返し、強度を確保できたら像の背中を切って像内の塑像をばらばらにして取り出します。空洞になった像内に薄板の木枠の心木を納め、像と心木を釘で固定し 、漆が収縮して像が痩せるのを防ぎます。張子の像のようになった表面に、「木屎漆（こくそうるし：漆に木の粉末などを混ぜて作ったペースト）」を使って細かい仕上げをして完成させます。

聖武天皇と光明皇后

聖武天皇の時代は天然痘が流行り、地震が頻発し、旱魃は多く華やかな時代ではありません。神亀4(727)年に待望の男子を得、生後わずか32日には皇太子に立てられましたが、翌年には病気となり寝込んでしまいます。この時代の中国には『新修本草』という薬学書がありました。この『新修本草』は中国に古くから伝わる『神農本草』を唐の高宗が充実改訂したものです。

最近小松市の遺跡から「石膏」というものの塊りが見つかっていることから、『神農本草』の知識の一部は弥生時代に列島に伝わっていた可能性もあります。また、仁和寺には『新修本草』の写本があり、天平3(731)年に伝えられたとの奥書がありますので、皇太子の闘病中には『新修本草』もあったかも知れません。しかし、内容を理解できる人がいなかったので、皇太子の病回復には役立てられず、太子は夭折していまします。天皇・皇后はさぞ悔しかったはずです。

正倉院の宝物の起こりは、天皇の七七忌に東大寺の瑠遮那仏に奉献した宝物と薬に始まります。奉献した60種類の薬の目録である「種々薬帳」の巻末には、「病に苦しんでいる人のために必要に応じて薬物を用い、服せば万病ことごとく除かれ、千苦すべてが救われ、夭折することがないように願う」といった願文が記載されています。皇后は23年前に亡くなった皇太子のことを思っていたのでしょう。東大寺の起こりは権力に驕った為政者の栄華を見せびらかすようなものではなく、我々にもよく理解できる我が子を思う親の心情から始まっているのです。

鑑真和上

唐招提寺に安置される鑑真和上坐像は、晩年を共に過ごした彼の弟子たちが作った乾漆像ですが、上の睫毛が下瞼に書かれており、瞼を閉じていたため目ヤニで張り付いていたことを表しています。最晩年には視力を失っていたのは間違いないようです。

東大寺の僧、良弁に経典の借用を申し入れた手紙は弟子の代筆とする説もあります。しかし、カリスマ的指導者だった師匠の代筆は相当の緊張感があるはずですが、その割には自由に書かれていて、鑑真本人の直筆と見るのが自然です。手紙の3、4行目にある4つの「部」の最終画の長さが、余白に配慮してそれぞれ異なり、盲目の人では無理な芸当だと思われます。つまりこのとき鑑真は失明していなかったのです。

奈良発祥の製薬会社の開発部長によると、生薬の鑑定は視覚・嗅覚・味覚の順に行われるが、生育地が異なる場合には嗅覚・味覚・視覚の順に変わると言います。続日本紀には、鑑真が嗅覚による情報で『新修本草』に載っている薬草を鑑定した様子が記載されています。この記述から鑑真が既に失明していたとも言われていますが、異なる生育地では植物の形態が変わることを熟知していた鑑真が、視覚より嗅覚を優先したことを物語っているのです。失明していたから嗅覚に頼ったというのではないのです。

法華堂

法華堂は東大寺大仏殿の東側の上院地区と呼ばれている少し高いところにあります。続日本紀には、神亀5(728)年に皇太子を亡くした聖武天皇が追悼のための山房を作ったと記されています。それがやがて「金鐘山房」「金鐘山寺」と呼ばれるようになり、「金鐘寺」となったようです。

大和国の国分寺である大養徳国金光明寺(やまとのくに こんこうみょうじ)はこの金鐘寺と福寿寺の2つの寺院がのちに統合された寺院で、さらに東大寺へと変遷します。東大寺の僧　森本公誠氏は、総国分寺である東大寺大仏殿を作る際に、金光明寺の内覧の仏像を法華堂の八角壇の外側に移したと考えておられます。

1180年平重衡の南都焼討ちによって焼失した『東大寺要録』には、“天平5(733)年に羂索院を創立。古くは金鐘寺と号す、是也”と記されていました。しかし焼失して原本が残っていないので信憑性に疑問を持たれていました。ところが、1996年以降の法華堂八角須弥壇の調査で、下段に七体分の台座跡が確認され、いずれも幅83センチ前後の八角形であることが判明しました。戒壇堂の四天王立像の四体、ミュージアムの日光・月光菩薩像の二体、法華堂の執金剛神像はみな塑像製であり、塑像の心棒が八角形の台座に固定されています。須弥壇の台座跡はこれら七体の塑像が安置されていた痕跡と判明しました。さらに、2010年からの修理の際に法華堂から採取した二つの木材の伐採年が、年輪年代法によって730年と731年であること、須弥壇の木材が729年であることが判明しました。つまり『東大寺要録』に記されていたことを裏付ける結果が得られたわけです。東大寺は、728年に夭折した我が子の菩提を弔うために、聖武天皇が建立した金鐘山房が始まりだったのです。

平城宮朱雀門を出て二条大路を真東に、標高の少し高い上院地区に建てられた金鐘山房(現法華堂)が見えたでしょう。